

(2016年9月10日～18日)

岡山の実家の雑事で、前日は故郷の岡山県井原市泊まり。

実は、誰も居なくなった実家の土地・田畑などの引継ぎ相続手続きを依頼している地元の司法書士から連絡があり、拙宅の墓地が我がご先祖様ともう一人の他人との共有名義になっているので、この共有名義の相続権利者の承諾書が無いと相続手続きができないが、この共有者が誰だか分からず、従ってその相続権利者も分からないので、調べて欲しいとのことであった。

この共有名義者の名前は土地登記簿には記載されているが、住所や本籍などの記載は無く、どこの誰やら分からないので株内の人にでも聞いてみてくれないうかとの依頼であった。株内の人にも聞いてみたが、何しろ大昔の人のことなのでその頃のことを知っている人はもう誰も居なかった。

件の司法書士は、それでは菩提寺の過去帳を調べて貰うか、またはこの墓地にある墓石でこの共有者の名前がある墓石に出身の所番地が刻んである墓石などはないだろうかと言ってきた。墓石はどれも古いものばかりで文字も判読出来ず、それらしき俗名の石塔も見当たらなかったため、菩提寺に聞いてみたら戒名と死亡年月日だけは過去帳に記載されていた。

それによると120年前に死亡された人であった。当然ながらその頃のことを知っている人は株内にももういない。

この戒名を手掛かりに墓地の石塔を調べ直してみたら、この戒名が刻んである小さな石塔が見つかった。

近所の人の話では、どこの誰かは分からないが、この墓石にお彼岸の頃にお参りに来る人がいるらしいとのことだったので、或いは置手紙でもしておけば連絡がつくかと淡い期待をして、右のような紙を墓石の横に置いておいた。

#### 《後日談》

このアイデアは効果が顕れて、早くも10日後には子孫の方から連絡を頂いた。

大昔の頃は拙宅と同じ株内に住居があったらしいが、その場所が何処だったのかなどは全く不明だそうだ。拙宅の

大塚 源右衛門 様  
 御子孫、御縁戚の皆様

---

私は貴 源右衛門 様と当墓地の  
 共同所有者となり居ります 大塚 藤市 君の  
 4代目の子孫に当る 大塚 忠孝 君です。  
 今度 父母の死去に伴い 実家の土地等と  
 相続することと致しました。  
 当墓地につきましても、源右衛門 様の  
 御子孫、御縁戚の皆様とご相談させて  
 頂いた上で、その相続手続きとご諸に  
 進めさせて頂ければ幸甚に存じます。  
 つきましては誠に恐縮ですが、皆様の  
 ご住所、ご氏名、ご連絡先電話番号等を  
 私まで御連絡下さいれば幸甚です。  
 私の実家は直ぐ下に居りますが今は  
 誰も住んで居らず、私は神奈川県に  
 在住に居ります。(裏面)。  
 以上御面倒を御掛け下さるか、  
 何卒宜しくお願い申し上げます。 2016年9月9日

旧宅があった山の上の奥の藪の中に、土塁の跡のような場所があったので、或いはその辺りに住んでおられた人かもしれない。

そのような訳で、前日は故郷の井原市のいつものホテルに泊まって、いつもの料理屋で般若湯を頂き、翌日「しまなみ海道」(本四架橋)を渡って今回の遍路のスタート地点・伊予大洲に出た。



(拙宅の墓地。株内の人も同居。右の墓石が件の共有名義者の墓。

右奥は今は山になっている拙宅の旧跡)

### 【9月10日】岡山県井原市～伊予大洲

大洲の街は伊予の小京都と呼ばれ、近くの卯之町や内子ほどではないが、由緒ありそうな落ち着いた佇まいの街であった。

街中を悠悠と肱川が流れ、この川で行われている鶺鴒は岐阜の長良川、大分県日田の三隈川と並んで日本三大鶺鴒の一つであるそう。この鶺鴒は、鶺鴒匠舟と観客が乗った屋形舟が並走しながら川を下る「合わせ鶺鴒」という珍しいものだそう。それに、河畔の大洲城のライトアップが川面に映って何とも幻想的な風景を醸し出しているそうで、この機会に是非観覧したかったのであるが、残念ながら予約満員で礼止めとなっていた。



©Tatsuroh Kohno (Studio Mr.K)

大洲のもう一つの名所は臥龍山荘である。ここには以前から一度は言ってみたく思っていたので、この機会に行ってみた。この場所は肱川の深い淵「臥龍ヶ淵」にあり、かつては歴代藩主の遊賞地であったが、その後荒れていた庭園を明治時代になってから地元出身の木蠟の豪商が買い取り、余生を過ごすために建てなおしたもので、桂離宮、修学院離宮などを模して作られた名建築だそう。特にその中でも大徳寺庵風の「不老庵」という茅葺茶室は、船内に見立てたその天上の網代張に臥龍ヶ淵川面に映った月光を拾うと言う趣向で有名だそうだが、残念ながら月が昇る前に閉館となった。また、崖から飛び出したこの建物の一角の柱として、檜の生木を「捨て柱」として使っており、この生木は120年経った今も健在で、柱としての高さは寸分も狂わず、成長は上には伸びず横に成長しているのだそう。

また、石垣にも「流れ積み」、「乱れ積み」、「末広積み」などという工夫の構がなされているそう。手水石や庭石の水中にも野の花が浮かべてあって、なかなかの心配りも誠に結構なことであった。

(次ページに写真)



本邸・臥龍院



茶室・不老庵



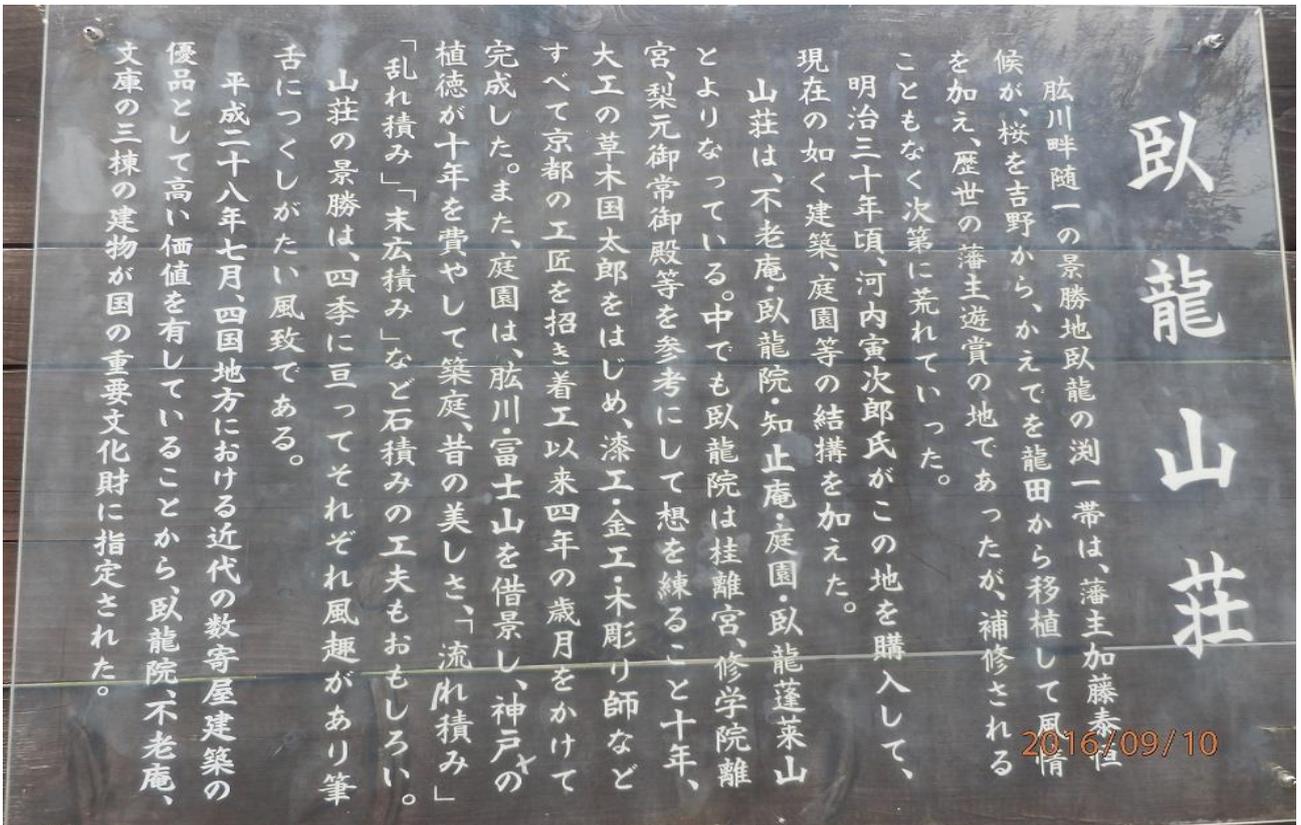
榎の生木「捨て柱」



種々の工夫を凝らした石積の結構



崖窟の湧水にも野の花が浮かべてあった



今晚の宿：大洲「ときわ旅館」(素泊まり 4,300 円、  
一泊朝食付き 5,000 円、2食付 7,000 円)  
部屋は古いが、おもてなしは女将、若夫婦とも  
大変に立派であった。歩き遍路に高い評価の宿。  
直ぐにお礼状が自宅宛に届いていた。

今晚の夜遍路：宿の近くの焼鳥屋「いっぷく」4,500 円。  
チョイ高い。若者が最近始めた店。ママアだが、  
若者だけに居酒屋のうらぶれた雰囲気が無いのが×



### 【9月11日 晴】別格7番「金山出石寺」往復

出石寺は、山号を金山といい、寺号の上に山号を被せて  
呼ぶのが一般的らしい。「金山出石」というのは、分かり易いようで全く分かりにくい寺名ではある。

寺伝によれば、その昔ある猟師が狩りに出て一匹の鹿を見つけ、その後を追うて山に登り、まさに鹿  
を射殺そうとしたところ、突然全山振動して光明赫赫と輝き、鹿の姿はかき消え、鹿の立っていた足下  
の石が真二つに割れ、千手観音菩薩・地藏菩薩の像が地中から湧き出して金色の光を放った。この奇瑞  
を目撃して猟師は殺生を業とする生活をやめて仏道に入り、自ら道教を名乗りこの仏像を本尊とし金山  
出石寺と命名した、という次第であるが、これはどこにでもある後世のこじつけに違いない。

この寺がある山は出石山<sup>いざし</sup>と言い、かつて銅の鉱山があった場所である。銅鉱石を掘れば石(ズリ)も  
沢山出るであろうから、「金山出石」というのはごく自然な命名であろうから、この山に建立された寺  
をその山名で呼ぶのは極めて自然なことであるから、そのように考えた方が理にかなっている。

どこの寺でもそうであるが、寺伝や御詠歌などというシロモノは後世の単なる辻褄合わせ、それもへ  
タクソな作文と考えた方がよらしい。

さて、一般的に、四国八十八札所のお寺と  
別格二十霊場は距離も随分離れていて、後者  
は特に人里から離れた山中にある場合が多い。  
この金山出石寺もその典型であって、大洲の  
街から徒歩で往復まる1日かかる大洲市・  
八幡浜市の市境の山中にある。大洲の街から  
見ると遥かに高い山の上という感じがして、  
この暑い最中にカンカン照りの林道を距離 25  
km、標高差 800m を 10 時間以上も歩くと熱中  
症で死ぬのではないかと思われた。道中  
には集落も殆ど無く、水も無いのでペットボト  
ルを 4 本程持ち上げたから草臥れた。



(大洲市街の肱川橋から出石山を望む。左奥の峰が出石山。  
城は大洲城。霧は盆地、大洲の名物)

途中の山中にある小さい集会所でオバサンが掃除を  
していたので、玄関先で休ませて貰ったら、冷たい缶コーヒーをお接待で頂いた。喉も乾いていたので  
大変美味かった。聞けば、今日は秋の道普請の日で、昼間に道普請をしたオジサン達が夕方この集會  
所に集まって来て慰労宴会をやるから、それに備えて座敷の掃除をしに来たのだそう。

ここからお寺までは、林道や山道を歩いたが、帰路も含めて遍路はおろか誰 1 人にも会わなかった。  
やはり別格二十霊場は八十八霊場のような人出は全く無い。独りで山中を歩いていると淋しくなってく  
るので、真言や般若心経をブツブツ唱えたり、メ空へバリなどを大声で唸ったりするが、他には誰も居  
ない山中であるので、安心してモゲ節を放歌高吟できるというものである。

金山出石寺は、そのようにして5時間ほど歩いた山上にあった。愛媛県の西端、佐田岬半島の付け根の山上であるから、伊予灘や豊後水道、大洲盆地から石鎚山への山並みなどが見られた。ここには宿坊があり300人も泊まれるそうだから、よほど大きな講などがあるのであろう。

境内にうどん屋があったので、冷し餛飩を喰いながら缶ビールを2本頂戴した。お寺の境内で昼間から堂々と般若湯を頂けるというのも人里離れた深い山中のお寺だからであろう。

ご本尊は千手観世音菩薩。地中から湧き出した秘仏であるから、本堂の地下の岩床の下に祀られているそうで、50年に一度しかご開帳がないらしい。ひょっとして、銅山から掘られた銅鉱石の中に偶々仏像に似た形をしたものがあって、それを秘仏としたのではなかろうか。マ、御本尊と称する仏像にはえてしてそのようなモノが多いのではないか。次のご開帳は来年（平成29年）であるそうだから、是非真実を見てみたい。御真言は「オン バサラ タラマ キリク」。



(深山にある寺院としては大きな伽藍の金山出石寺)



←ホンマかいな？

ちょっと微笑ましい。



(帰途の林道から眺めた大洲盆地。中央を流れているのが肱川)

本日は、予定では大洲から1時間ほど歩いた先の別格8番「十夜ヶ橋」の橋の下で寝姿の弘法大師と般若湯を一献しつつ野宿をする積りだったが、大洲に戻った時には疲労困憊の態、心はまたまた夜遍路の赤提灯に舞い戻ってしまって昨日と同じ宿のときわ旅館に投宿してしまった。

今宵の夜遍路は、ときわ旅館の若旦那ご推薦の“うらぶれてはいるが、情緒ある赤提灯”「道草」という呑み屋に行った。初老のご夫婦二人でやっている家庭的な良い店であった(3400円)。

- 6:30 旅館発、11:30~12:30 金山出石寺、大洲着 15:40 (「大洲ルート」経由で往復)
- 本日の遍路距離 25km

### 【9月12日 曇り 午後雨】大洲～内子町小田

天気予報では今後1週間ほどは秋雨前線が停滞して雨ばかりらしい。やはり日頃の行いが悪いのか。新谷という所にあったスバル自動車の販売所の店先に設けられた遍路休憩所で合羽でも出そうかと立ち停まったら、冷たいアイスコーヒーをお接待頂いた。ガラスコップに氷まで入っていた。有り難いことである。

内子町まで歩いたところで本降りになった。

今日の泊まりの予定は、内子から山中の集落が無い道を20kmも歩いた先の小田という山間の集落であ



るから、途中で大雨になったら逃げ込むような場所も無い。そうだ!、イザという時には飛天の術というものがあり、大雨に打たれて風邪を引くよりマシかと内子町営バスに1時間揺られて小田迄行った。小田には内子町役場の小田支所もあって、商店街もあったが、ご多分に漏れず淋しいシャッター街であった。

今日の宿は堂山太子堂という御堂である。インターネットの野宿遍路情報によれば、商店街の入り口の「小番食堂」で使用料300円を払って鍵を借りよということになっている。よしよし、それならその食堂で一献傾けられるワイと喜んだが、残念なことに食堂は閉まっていて、記入ノートと鍵と使用料入れの竹筒がぶら下げてあった。記入されたノートを見ると、10日ばかり前に外国人が泊まっていた。

マ、とにかくこの御堂に荷物を置いてから呑み屋でも探そうかと御堂を探したが、付近には人通りも全く無く、小1時間ほども雨の中でウロウロと探して往生をイタした。やっとたどり着いた御堂は今にも倒れんばかりの掘立小屋であったが、マ、泊めて頂けるだけでも有り難いとせずばなるまい(タダで泊まれる場所に不平不満を言うようでは、全く修行ができていないワイ。遍路修行の源境は他人のお接待(好意)に縋って我が口と心を糊すことにあるのだから)。



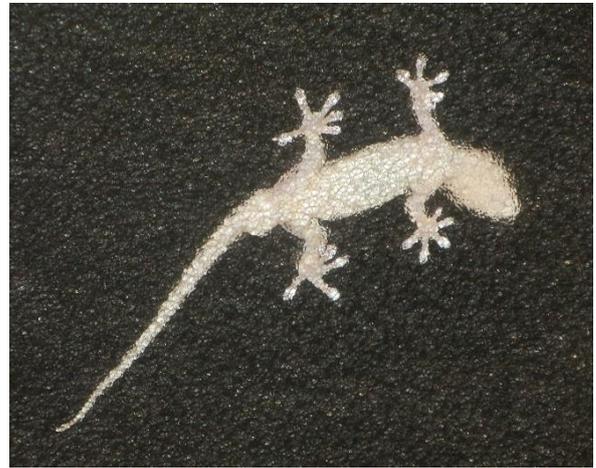
堂山太子堂 右の瓦屋根が太子堂、  
赤のトタン屋根が通夜堂(集会用座敷)



太子堂内壇



通夜堂には布団も備えられていた



このような物も窓ガラスに貼り付いていた

通夜堂にザックを置いて布団を敷いてから夜遍路に出掛けた。商店街に一軒旅館兼料亭があったが、本日は泊り客があるので料亭は閉店とのことだった。泊り客があれば普通なら料亭も開けるのではなかろうか。どこかに呑み屋は無いかと聞くと、ここから 3km ほど下に一軒あるというので、トボトボと行ってみたら、残念ながら“本日定休日”だった。呑み屋はおろか飯屋なども他には全く無い“長閑な”町であった。かなり前に廃業したと思われる寿司屋のうらぶれた看板がひとり風に揺れていた。これといった観光資源もないらしい山間の町なので、泊まっていくような旅行者もなく、従って食堂なども成り立っていないのであろう。

トボトボと商店街までまた 3km ほど坂道を戻って少し先まで商店街を歩いてみたら、何と幸運なことに酒屋が一軒まだ開いているではないか！！ しめた！！。ロング缶ビール 3 本ぶら下げて太子堂に戻り、弘法大師にも般若湯をお供えしてそのお流れを頂き、明朝の朝食用にと買っておいだキツネ寿司を肴に淋しい夜遍路となったのでありました。マ、街のネオン街に出るよりもこの方が本当の夜遍路であるのかも知れない。

夜半、トタン屋根を叩く激しい雨音に目が覚めた。この豪雨は朝になっても止む気配は無かった。後刻知ったのであるが、お隣の大分県では大洪水の非常事態が発生していたのである。

- 7:45 ときわ旅館発、12:00~14:00 内子（雨宿りと昼食）、町営バスにて小田着 15:00
- 本日の遍路距離 32km（内 歩=12km、飛天=20km）

### **【9月13日 終日雨】内子町小田～44 大寶寺～45 番岩屋寺～三坂峠～46 番浄瑠璃寺門前・長珍屋**

朝から猫と犬が降ってくる集中豪雨。雨脚が激しくて一寸先も見えないほどだ。

内子から大寶寺や岩屋寺がある久万高原に抜ける遍路道は<sup>ひわた</sup>錫田峠越えと<sup>のうその</sup>農祖峠越えの 2 本がある。第 1 回目は前者の方を越えたので今回は後者を選ぶことにしていた。昨夜泊まった小田から大寶寺のある久万までは 17km ほどの近距離であるが、農祖峠越えの山道は遍路転がしの悪路だそうであり、この大雨では道が川になっていて通れない可能性が大と踏んで、昨日折角通って来た往路の内子まで町営バスで逆戻りし、内子駅から JR で松山に出て、更に松山からバスに 1 時間乗って久万に入った。

チョット距離感が違うが、例えば東京から群馬県の高崎に行くのに、東海道新幹線で名古屋迄行って、そこから中央本線で長野迄戻り、更に長野新幹線で高崎まで戻るといようなものであった。

松山からのバスは国道 33 号線の三坂峠を越えて久万高原に降ったが、ウネウネとした峠越えの道は折からの濃霧のために幻想的な雰囲気醸し出していた。このバスが久万のバスセンターに着いた途端、隣に岩屋寺方面行のバスが待っていて、“お遍路さん、45 番札所・岩屋寺ならこのバスですよ。早く乗

って下さい”という運転手氏の言に急かされて、“間違っ”乗ってしまった。マ、どうせ雨も降っていることであるしそれならそれで、巡礼の順番が違ってくるが帰りに44番の大寶寺に寄ればいやとバスに身を任せた。

一度飛天の術を使うと、どうしてもそちらに傾いてしまう。マ、明日からはまたアルキに戻るとして、今日のところは大寶寺を打ち終えたらタクシーで三坂峠まで行き、そこから松山方面へ歩いて下れば或いは今日の内に次の札所46番浄瑠璃寺まで辿り着けて2日分ほど先に進めるという寸法だという理屈をつけて、岩屋寺からの帰途もこの折り返し便のバスに乗ってしまった。嗚呼。

三坂峠から雨の山道を下るのに骨が折れて、浄瑠璃寺に着いた時は既に納経所が閉まっていた。

この辺りには TENT を張るような場所も見つからなかったし、夜廻路をするような店も無かった。またコンビニなども全く無い山里であったので、飛天の術を使った序に門前の民宿旅館

「長珍屋」に泊まってしまった。この民宿旅館は、廻路ツアーなどの団体が泊まるのであろう、収容人員140人という大旅館であった。高野山の霊木で壁を張ったという新館に泊めてくれたので気持ち良かった。風呂も温泉風の大きな浴槽でゆったりと入れた。お値段も2食付で6500円という安さ、これもまた大変結構。



長珍屋（左のビル）

- 7:15 小田からバス発、内子着 8:15、9:55 松山発バス、11:15 久万発バス、11:30 岩屋寺着、13:05 岩屋寺発バス、14:00 大寶寺、タクシーで三坂峠、同発 14:30 徒歩、17:30 長珍屋着
- 本日の廻路距離 ?? (徒歩は12km)

### **【9月14日 終日雨】46番浄瑠璃寺～47番八坂寺～48西林寺～49浄土寺～50繁多寺～51石手寺**

本日も朝から雨。今日の行程は平野の道路歩きであるから、超スローで歩いた。今日の札所は連続しているので、6カ所廻れた。今回は前回見損ねた「衛門三郎」の頓死した子供の墓と伝えられている八ツ塚群集古墳を見てきた。三坂峠から松山市側を下った郊外の田園地帯にあり、小さな古墳らしき土盛りが8ツほど田圃の中に鎮座していた。

衛門三郎というのは昔この辺りに居た伊予の豪族だったそうだ。或る時彼の屋敷を乞食僧が訪ね一碗の食を求めたが、強欲な衛門三郎は僧の捧げる托鉢を箒で地面に叩きつけて僧を追い返した。ほどなく衛門三郎の8人の子供が続々と死んでしまい、彼はこの乞食僧が弘法大師であったことを悟った。彼は滅罪のために、全財産を処分して大師の後を追って巡礼の旅を重ね、21回目の巡礼の途中で命尽きようとした時に大師が出現。衛門三郎は懺悔を果たし再生を約束されながら果てた。この巡礼が今の四国廻路の始まりになったと言われているが、その最期の地は徳島県の山中にある12番札所「焼山寺」から下った所にある鍋岩という山中の集落で、衛門三郎の突いていた杖から育ったという大杉があり、小さな祠が建っている。杖杉庵じょうしょうという。

また、衛門三郎の今はの際に大師が何か言い残すことは無いかと尋ねたら、彼は来世は伊予ノ国主の子供に生まれ変わりたいと頼んだ。大師はこれを了として、死にゆく彼の右手に小石を握らせてやった。

後世、伊予ノ国主・河野氏に子供が授かり、その子は衛門三郎と書かれた小さな石を手を持って生まれてきたので、この子が彼の生まれ変わりであることが分かり、河野氏はこれを瑞兆として伊予松山の某寺に莫大な寄進をした。これが今の第51番札所「石手寺」である。

マ、衛門三郎という人物の存在のでっち上げも含めてこれらの伝承は後世のその筋の作り話であろう。

この「衛門三郎伝説」については、石手寺が寺の縁起の一つとする一方、この八ツ塚群集古墳を寺域に持つ四国別格二十霊場第9番「文殊院」が我が寺こそ衛門三郎の菩提寺であると喧伝してお互いがそのルーツを争っているようであった。先発の八十八札所と後発の別格二十霊場の勢力争いの一種かも？



(衛門三郎伝説。乞食僧の托鉢を叩き割る衛門三郎)



(杖杉庵。徳島県神山町)

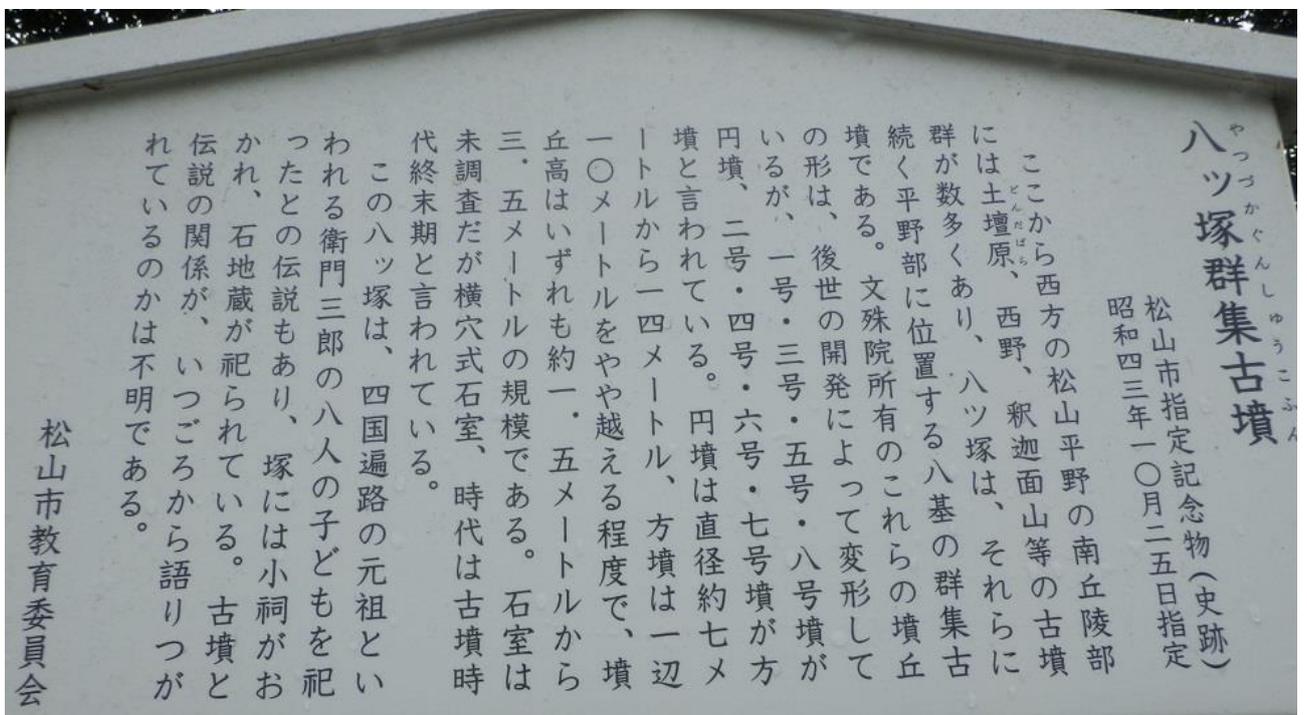


(八ツ塚群集古墳群のひとつ)





(田圃のなかの古墳群)



八ツ塚群集古墳

松山市指定記念物(史跡)  
昭和四三年一月二十五日指定

ここから西方の松山平野の南丘陵部には土壇原、西野、釈迦面山等の古墳群が数多くあり、八ツ塚は、それらに続く平野部に位置する八基の群集古墳である。文殊院所発のこれらの墳丘の形は、後世の開発によって変形しているが、一号・三号・五号・八号墳が方墳、二号・四号・六号・七号墳が方墳と言われている。円墳は直径約七メートルから一四メートル、方墳は一辺一〇メートルをやや越える程度で、墳丘高はいずれも約一・五メートルから三・五メートルの規模である。石室は未調査だが横穴式石室、時代は古墳時代終末期と言われている。

この八ツ塚は、四国遍路の元祖といわれる衛門三郎の八人の子どもを祀ったとの伝説もあり、塚には小祠がおかれ、石地蔵が祀られている。古墳と伝説の関係が、いつごろから語りつがれているのかは不明である。

松山市教育委員会

さて、今宵の宿は石手寺の通夜堂に泊めてもらった。かつては信徒会館にでも使われていたのか大きな座敷に舞台が付いている建物であった。今は倉庫にでも使われているようで、埃を被っていた。伽藍の隅の隅の人気のない幽霊のような廃屋のような建物の広い座敷に独りで寝るのもちょっと淋しくて怖いものではあったが、恐ろしい閻魔サマや不気味な仏像などは鎮座ましましていない部屋であったので、

高軒で寝られたのが有り難かった。真夜中に衛門三郎の霊が出てきてうなされたような気もした。  
翌朝、納経所に御礼を申し上げに行ったら、安眠できましたかと親切であった。



(奥の建物が石手寺の通夜堂。伽藍の隅にあった。この大広間に独りで寝た。汚く湿ってはいいたが、布団と枕もあった)

今宵の夜遍路は、近くの「大瀬」という焼鳥屋に行ってみた。「大瀬」というのは伊予遍路の途中の内子町にある一集落の地名で大江健三郎の出身地でもあるので、ひょっとして大瀬の話でも聞けるかと期待して行ったら、期待が当たって大将が大瀬の出身であった。大江健三郎や彼の生家の話も出た。また、アルバイト店員のオニイさんが愛媛大学農学部の学生で、卒業後は大学院に進んで日本の林業の復興について研究したいと言っていたので、大いに励ましたりして話が弾んだ。

帰途、橋の袂に面白そうな呑み屋があったので、ハシゴをした。汚いがなかなか味のある店であった。



(焼鳥 大瀬)



(ハシゴをした「葉牡丹」)



石手寺の門前には、「集団的自衛権不用 不殺生祈りの会」という看板が出ていた。このようなアピールはお寺ではチョット珍しい。

- 9:40 浄瑠璃寺、雷雨 1 時間半雨宿り、9:10 八坂寺、衛門三郎ハツ塚立ち寄り&雨宿り、11:40 西林寺、14:20 浄土寺、15:30 繁多寺、16:30 石手寺
- 本日の遍路距離 14km
- 夜遍路 「焼鳥 大瀬」 3600 円、「葉牡丹」 1200 円

### 【9月15日 曇り・雨】石手寺～52番太山寺～伊予北条

前は急いでいたために入れなかった道後温泉に今回は漬ってきた。漱石が通ったという部屋（後に「坊ちゃんの間」と命名された風呂上がりの休憩部屋）も見えてきた。

道後温泉は、有馬温泉、紀伊白浜温泉と並んで日本三古泉の一つで、日本書紀、万葉集、源氏物語にも登場する名湯である。古名を「にぎたつ＝塾田津」（煮える湯の津）と言った。



（漱石が通った「坊ちゃんの間」）

この温泉は朝早くから夜遅くまで営業していて、地元の人々が朝風呂を楽しめるようになっている。外観も立派な建物であるが、「神ノ湯」と呼ばれる湯船も相当なもので、下の写真に示したように四国では有名な讃岐庵治石の湯釜や伊予砥部焼の壁画が張ってあった。

湯釜とは湯が出る口で、万葉集の山部赤人の長歌「伊予の温泉に至りて詠める」や、出雲大社のナントカいう宮司の歌が万葉仮名で刻んであった。山部赤人の万葉集の長歌は、ちょっと長いが

「皇神祖之 神乃御言 敷座國之  
 盡 湯者霜 左波爾雖在 嶋山之  
 宣國跡 極是凝 伊豫能高嶺乃  
 射狹庭乃 崗立而 譚思 辞思為  
 師 三湯之上乃 樹村乎見者 臣木  
 毛 生繼尔家里 鳴鳥之 音毛不更  
 遐代尔 神左備將往 行幸處」

訓読は、「すめろぎの 神のみ  
 ことの 敷きませる 国のことご  
 と湯はしも さわにあれども 島  
 山の 宣しき国と 極みこぎ 伊予  
 の高嶺の 射狹庭(いさには)の岡



に立ちて うたしのび しのびせし み湯の上の 樹群(こむら)を見れば 臣の木も 生ひ継ぎにけり  
 鳴く鳥の 声も変わらず 遠き代に 神さびゆかむ いでましところ」。

意味は、「天皇の皇祖である神が宣言なされた、神に継がる天皇が治めなされる大和の国中に温泉はたくさんあるけれど、島山の立派な国とここにかき集めたような伊予の高き嶺の、神を祭る射狹庭の岡

に立って、昔に詠われた詞を懐かしみ、述べられた詞を懐かしむと、温泉の上に差し掛ける樹群を見ると樅の木も育ちその世代を継ぎ、鳴く鳥も昔も今も声は変わらない。遠い時代に天皇が神として御出でになられた、御幸された場所である」。

某宮司の歌は、「知波弥布留可美世那賀良乃伊伝湯爾波阿弥爾可志古支美多麻左支波布」。

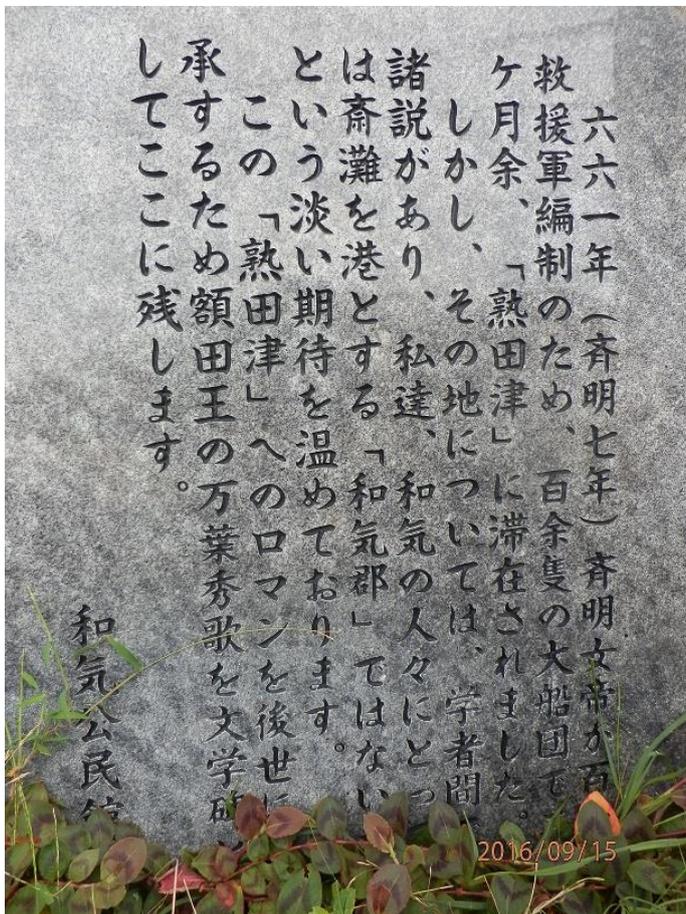
訓読は、「しはやぶる神代ながらの出湯には あやにかしこき御魂さきはふ」。

“あやにかしこき”は“靈妙言いようもなく畏れ多くて勿体ない”、“さきはふ”は“生命力がみなぎっている”の意味。……嗚呼、右から左への俄か学問、コピペも草臥れるナア。

(上に掲げた道後温泉の写真は、温泉内の撮影は禁止されているので、関係 HP より引用した)

ところで余談であるが、道後温泉の古名の「にぎたつ＝塾田津」は、6世紀に斉明女帝が百濟救援のために大船団を編成して滞在した湊であるとの伝承があり、額田王の万葉歌に詠われた「にぎたつに船乗りせむと月待てば 潮もかないぬ 今は漕ぎ出でな」の故地とされている。この地がはたしてどこなのか、種々の説があるそうだが、西瀬戸内海地方のどこかの湊であったことは間違いなからう。

本家とされている道後温泉から少し北に行った伊予灘の「伊予和氣」という町(53番札所「円明寺」がある)の公民館前には、下のような石碑が建っていた。



(額田王の万葉歌)

「にぎたつに 船乗りせむと月待てば  
潮もかないぬ 今は漕ぎ出でな」

「エンヤラヤ節」

- ♪エンヤラヤのエンヤラヤのエンヤラヤの声聞きや、  
気が勇む。娘十七・八はポストでござる。  
赤い顔して入れさせる。
- ♪エンヤラヤのエンヤラヤのエンヤラヤの声聞きや  
気が勇む。娘十七・八は車掌でござる。  
早くお乗りと声かける。

さて、余談の序に更に余談をひとつ。

この「にぎたつに……」という歌は、若干の歌詞を変えた「握り立つに船乗りせむと月待てば、潮もかないぬ、今は漕ぎ出でな」を枕として、右上の枠内のようなセリフをくりかえす「エンヤラヤ節」という若者の猥歌があって、学生の頃はコンパなどでよく歌って同席の女学生の響きをかっめたものだった。

マ、斉明女帝ぬかだのおおきみ額田王(天武天皇妃、遊女の出自とも)も、また弘法大師もアチラの方面は相当にスキモノだったそうであるから、このような卑猥な話も多少は供養になるのではなからうか。

さて、ちょっと下世話の話が過ぎた。我がモットー“気品と知性”に戻ろう。  
 上で触れた伊予和気から伊予灘に面した遍路道を3里ほど歩くと、伊予北条に至る。この間の海岸には、  
 かつて瀬戸内海を制した水軍の雄「河野水軍」の本拠地だった風早があり、伊予灘や斎灘、瀬戸内海に  
 浮かんだ芸予諸島などの海の眺望がすばらしい海岸道路である。伊予北条の少し手前の西ノ下という在  
 所にはこの地出身の高浜虚子の句碑が建っていた。



(高浜虚子像)



(「この松の・・・」)

(「道の辺に・・・」⇒)

行き倒れ遍路を詠った「道の辺に 阿波の遍路の墓あはれ」は、傍にある右の遍路墓であるが、墓誌は備中西阿智竹本屋伎女墓と読めるから、今の岡山県倉敷市辺りにあった竹本屋という遊郭の技芸（遊女）の墓であろう。何故、“阿波の”と詠んだのかは分からないが・・・。

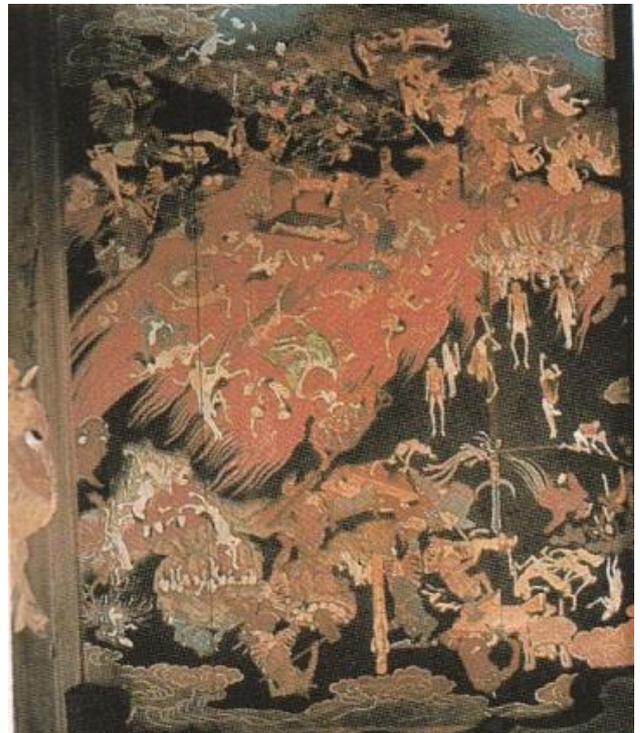
遍路行き倒れの遊女風情では、せいぜいその辺の野辺に埋めて貰えるのが関の山で、遍路墓を作って貰えることはまず無いと思われるから、この遊女は相当の花魁であったのかもしれない。⇒ ⇒ ⇒ ⇒

話の順番が戻るが、伊予和気の少し手前にある第52番札所「太山寺」の鐘楼はなかなか趣が深い建物であった。

壁画にはおどろおどろしい地獄絵が描かれているという。かつての八十八札所には、山門や鐘楼に通夜堂があったお寺もあったらしいが、このような通夜堂に泊めて貰うと、恐ろしくて御叱呼をチビってしまうであろうナ。



(太山寺鐘楼と地獄絵)



第 53 番「円明寺」には、お寺には珍しいマリア観音の像があった。隠れキリシタンを黙認していたと言われている。



今夜の宿は、遍路野宿リストから調べた伊予北条の杖大師養護院の通夜堂を当てにしていたが、ここは最近無住になったので通夜堂も廃止したとのことで、泊まれそうな次の御堂は未だ3里も先で途方に暮れた。前回は伊予北条駅の近くの旅館に泊まってなかなか感じが良い宿であったことを思い出して、今回もその旅館に舞い戻って泊めて貰った（素泊まり）。

今宵の夜遍路は、この辺で一軒だけ営業しているらしい居酒屋に行ってみた。宿も食堂を兼業していたのでこの宿の食堂で一献でもよかったのであるが、残念ながら食堂はやっていなかった。宿の直ぐ向かいには高級そうな料亭もあったが、そこはかなり高そうだったので遠慮した。

呑み屋は「勸商場」という呑み屋であった。店の<sup>じい</sup>爺店主と話しているうちに四国電力の伊方原発の話になり、原発反対派の小生と賛成派の爺店主の間で口論になってしまった。

小生「あれだけの福島原発事故を起こしながら、原発を続行しようとしている政府はケシカラン。おまけに安倍総理は原発メーカー（≒戦争企業）の言いなりになって原発のトップセールスマンとして世界に営業を掛けているのではないか。また、電力会社の手先となって、ブータンが埋蔵しているレアメタルをODA援助を使って採掘・輸入すると称して、日本の原発ゴミをブータンの坑道に隠し捨てるという悪行の目論みがバレて、ブータンから蟹轆をかった上に全く馬鹿にされたではないか」

店主「それは違う。ごく浅い一面的な見方でしかない。安価な原発の電力を使わないと日本の企業は海外企業に対抗できない。また、原発が立地している貧乏自治体は原発が無いと経済が成り立っていない。安倍政権を馬鹿にしてはいけない。アベノミクスが成功したからこそ日本経済も安定し、お蔭サマで庶民も相応の暮らしができていないではないか。安倍総理は救世主である」

小生「福島原発事故が起きて日本中の原発が総て停止した時でも、電力不足は全く起きなかった。原発電力は安価であると言うが、廃炉にかかる生涯コストを全く見込んでいない。即ち後世に多大な借金を残していることになる。その意味でもアベノミクスは既に破綻している。仮に一步譲歩して原発電力が若干安価であるとしても、それによる経済効果と国民の安全と健康のどちらが重要であるのか、議論するまでも無かろう。原発が破壊されれば日本だけでなく近隣諸国も放射能汚染されることは間違いない。安倍首相が安全というなら、自宅の敷地や首相官邸に原発を誘致すればよいではないか」。

呑み屋で政治と宗教の話は御法度であることは重々承知していたが、爺店主があまりにも強引でしつこかった。すっかり酔いも冷めてしまって、誠に後味の悪い夜遍路となった。嗚呼・・・。



(太田旅館 こちらは結構)



(居酒屋「勸商場」 こちらは最悪)

- 8:45 石手寺門前コンビニ（朝食コーヒー）発、道後温泉入浴、伊予鉄市内電車で道後温泉駅から松山市駅、同駅から郊外電車で三津駅、同駅よりループバスで太山寺、12:30 太山寺発、3:10 円明寺着、JR 伊予和気駅より次駅光洋台駅まで乗車、14:15 同駅より歩、16:30 杖大師養護院、17:00 太田旅館（素泊まり 4500 円）
- 本日の遍路距離 26km（内歩 たったの8km）
- 夜遍路 居酒屋「勸商場」5100 円 スタッフの対応も悪い。態度も値段も最悪の居酒屋。

### 【9月16日 曇り】伊予北条～54番「延命寺」～55番「南光坊」～今治市街

本日は、特記事項も無し。今治は野宿する場所が無いので、いつもの歩き遍路向け特別格安料金の今治第一ホテル泊（3500 円）。夜遍路は以下の2箇所。（鳥林＝2500 円、炉辺焼・磯海楽＝1050 円）

- 本日の遍路距離 28km



今治の焼鳥屋は前回行った「五味鳥」とこの鳥林がトップ2であるが、最近は鳥林の方が人気が高いとみえて、開店早々から待ち行列ができています。



**【9月17日 曇り】今治市街～55番「泰山寺」～57番「栄福寺」  
～58番「仙遊寺」～59番「国分寺」～今治市街**

本日も特記事項無し。夕方今治に戻り、昨日と同じホテル泊。夜廻路は、今治駅前の鄙びた食堂に入った。初老の夫婦二人でやっているパットしない大衆食堂であったが、ホスピタリティーはなかなかよろしかった（「つくし」2800円）。

●本日の廻路距離 15km



**【9月18日 雨】今治市街～別格10番「興隆寺」～別格11番「生木地蔵」～61番「香園寺」  
～62番「寶寿寺」～63番「吉祥寺」～64番「前神寺」～60番「横峰寺」**

本日は朝から雨の予報。本日の予定には遠い山中の別格10番「興隆寺」や63番「横峰寺」があり、雨の中の山中の廻路道を歩くのも億劫だったので、飛天の術を使った。

まずは、別格「興隆寺」。今治駅から予讃線で4ツ目の駅「壬生川駅」までJR乗車、そこからタクシーで興隆寺、生木地蔵を廻って貰って里の香園寺まで送って貰った。タクシーで廻路というのは、荷物も総てトランクに入れているので、納経帳だけを持って手ぶらで参道を歩くだけでよいので助かったが、結構なタクシー代になった。マ、お接待の地元への還元と思えば、これも供養のひとつではあるまいか。

興隆寺へはウネウネとした深い山中の道路を結構長時間走った。興隆寺は伊予西条一番の紅葉の名所だそうで、紅葉のシーズンには大変な人出であるそうだが、今はひっそりしていて誰にも遇わなかった。御本尊は十一面観世音菩薩。オン バザラ タラマ キリク。

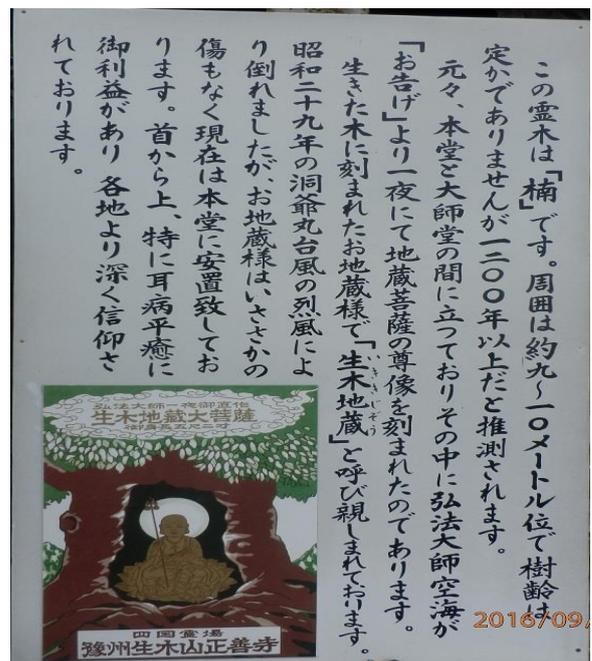
次に廻った生木地蔵は、路傍の祠程度のお寺であった。生木地蔵の由来は右の説明版のとおりである。



(興隆寺)



(生木地蔵)



61 番札所「香園寺」は、本堂が大師堂を兼ねた超近代建築の大聖堂となっていて、本堂には 600 席の椅子が並んでいる。この寺は講が盛んな寺であるそうで、講衆は全国で 2 万人を数えるというから、この大聖堂もそのような折の講に供するためのものであろう。しかし、寺院の伽藍という佛は全く無く、それゆえ、有難味も感じられないシロモノではあった。

この寺の境内には自由律俳句で有名な山頭火の歌碑が立っていた。また、旧海軍愛媛航空機乗員養成所の慰霊碑もあった。台座に彫られた碑文によれば、この養成所出身の神風特攻隊員ははじめ 50 人の空に散った殉死者の慰霊碑であるようだ。

かつて訪れた鹿児島県の知覧特攻平和館の特攻隊員の遺品展示物などを思い出しながら、菩薩に抱かれた航空服姿の特攻隊員に手を合わせたのであった。折から、山頭火の句碑にも特攻隊員の慰霊碑にも雨の中で公孫樹の落ち葉が散り敷いていた。



(香園寺大聖堂)



香園寺からは、3 時間ほど掛けて寶寿寺、吉祥寺、前神寺と雨の中を歩いた。本日最後の札所である次の横峰寺は石鎚山系の中腹にあり、標高は約 800m。八十八札所の中でも最もキツイ遍路道の一つである。この雨の中では山道が川になっているだろうからと、西条駅から登山バスで飛天をイタシた。

西条駅から一般の路線バスで黒瀬峠という所まで行き、そこで登山参拝専用のマイクロバスに乗り換えるのである。西条駅～横峰寺の往復で 3000 円のバス代であるが、これは雨の中では大変な儲けものであった。今回はこの横峰寺で一旦打ち切り、帰途岡山に一泊して、心臓の冠動脈バイパス手術で入院している学友の堀君を見舞った。



(山深い横峰寺)



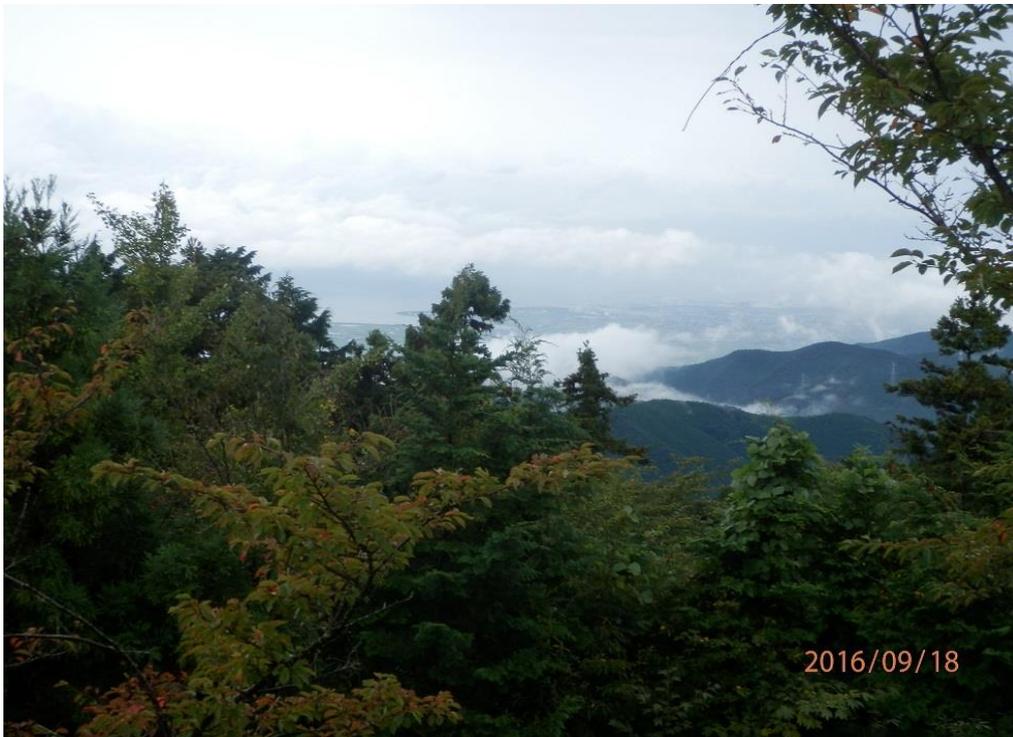
(改築された遍路休憩所)



(今晚はこの休憩所に泊まるという外人女性二人連れ)



(駐車場にあった売店。“アイスクリン”が泣かせる)



(雨が上がるのか山腹を霧が昇ってきた。左後方に瀬戸内海が見え始めた)

(その6 了)

「四国遍路野宿ノ記」目次に戻るには、画面最上段最左端の戻るボタン  で戻って下さい